



田主丸の町なみ



雲雀川用水



田主丸の町なみ



田主丸の町なみ

現在の田主丸の町並みは、他の地域と同様に時代の変遷により変化を受けています。しかしながら注意深く観察していくと、枡形など街道の形状や雲雀川用水、細い路地など江戸時代の町割りや、多くの江戸～昭和初期にかけての建造物・工作物が良好に残っていることがわかります。

現代的なファサードの商店の背後には町家が続き、天保絵図そのままに奥行き長い敷地が延びています。町の北側には、田主丸町の範囲を区画したと見られる小水路も残ります。

また、絵図にも見える若竹屋酒造には元禄期の酒蔵が現在も残り、町内の街道筋には漆喰による美しい装飾が目立つ旧古賀薬局や手津屋本店の土蔵や建物、旧田主丸郵便局や旧田主丸銀行など昭和初期の洋風建築、白壁の居蔵造りの建物などバリエーションに富んだ町なみが残されています。

なお、田主丸の他にも、久留米市内には石浦大橋や善導寺など、当時の中道往還沿線の雰囲気が残る場所が見られます。



石浦大橋（中道往還はここで巨瀬川を渡る）

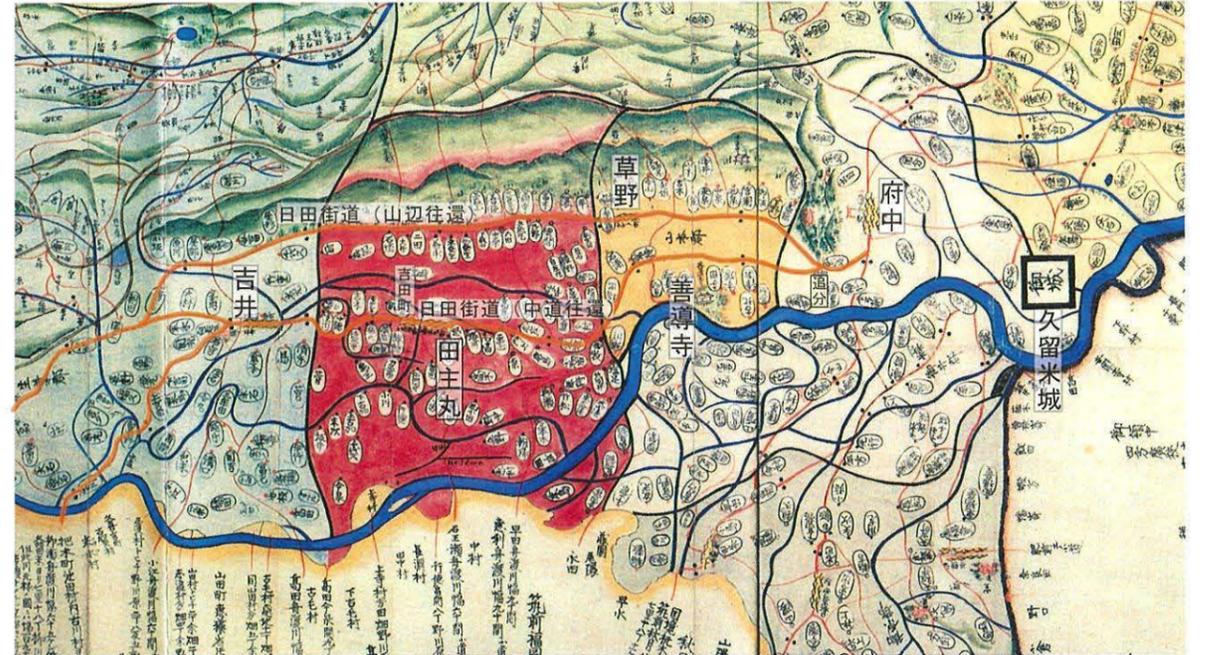


中道往還（太郎原付近）

歴史散歩

れきしさんぽ No.36

日田街道（豊後街道）中道往還と在方町「田主丸」



日田街道概要（筑後国絵図）

久留米市は地勢的に四方に開けており、古代から交通の要衝として発展してきました。近世になると、田中氏・有馬氏の治世の中で街道や宿駅、在方町の整備が進められ、現在もその痕跡をたどることができます。

御井町の高良山の門前に発達した宿場町「府中」は、坊津街道（薩摩街道）、日田街道（豊後街道）が交差する位置にあり、府中道を通じて柳川往還とも結ばれる久留米藩の主要な宿駅でした。坊津街道は大名が参勤交代に利用する参府街道であり、府中には本陣・脇本陣などがおられました。

日田街道（豊後街道）

寛政9年（1797）に編纂が開始された地誌「豊後国史」には、江戸幕府の九州統治の拠点である永山布政所（日田代官所：大分県日田市）から各地に向けて延びる街道が記されており、それらは日田街道と称されます。

久留米城下へは、永山布政所から日田両町ー上野ー石井ー内河野ー堂尾ー筑後国山北ー吉井を経て高良山の麓の府中宿に至り、その後久留米城下の札ノ辻へと続く経路と、日田から筑後川の対岸を進み、筑前国穂坂、久喜宮を経て筑後川を渡り、筑後国古川から吉井ー府中へと続く経路の二つが知られます。なお、吉井ー府中間は耳納山麓を進み草野町を通る「山辺道」と、平野部を進み田主丸町・善導寺を通る「中道」に分けられます。それらは府中の東側の追分で合流し、府中宿へと入ります。

また、日田街道は久留米城下を経て西の大石渡りで筑後川を越え、長崎街道に接続します。

◆歴史散歩No. 36◆

平成23年3月

発行 久留米市文化観光部文化財保護課
〒830-8520 久留米市城南町15-3

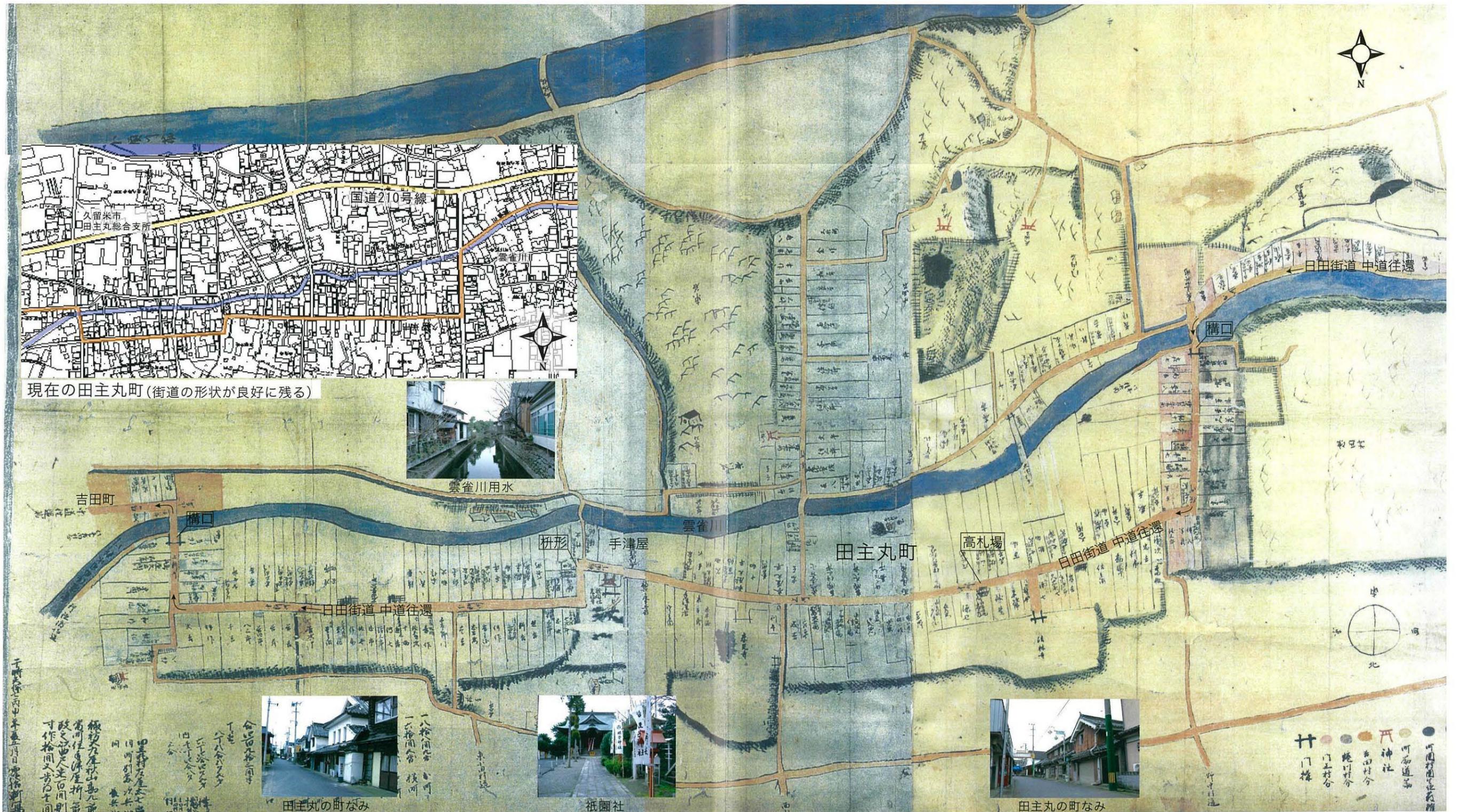
文化観光部文化財保護課

久留米市埋蔵文化財センター
久留米文化財収蔵館

0942-30-9225

0942-34-4995

0942-38-6194



田主丸井村絵図 藤田公一郎氏蔵

天保7年（1836）「田主丸井村絵図」

街道の景観を残す在方町「田主丸」

田主丸町は日田街道中道往還沿いに発達した在方町です。田主丸町の成立については記録により諸説ありますが、概ね慶長年間の町建てであると見られます。

天保7年の「田主丸町井村絵図」には雲雀川沿いの中道往還両側に屋敷地が描かれており、街道に面して間口が狭く奥に長い短冊形の地割りが見られます。絵図を西側から見ていくと、雲雀川を渡った場所に構口があり、往還は北側へ延び横町から東へ折れて中町（現在の田主丸中央商店街）に入ります。往還筋には法林寺・高札場、石垣新宮御旅所などが見え、続く祇園町の北東隅には祇園社・栄福寺、南側には手津屋の本店があります。また、この場所に柵形が設けられています。祇園町の東側には下新町・

中新町・上新町が続き、上新町の雲雀川を渡る手前に構口が見えます。なお、構口から更に東には田主丸町より成立が古いとされる吉田町が続きます。街道と並行するように町内を流れる雲雀川は寛文4年（1664）に従来の吉田溝を改修・開鑿してできた用水です。

田主丸町は、江戸時代以降現代に至るまで周辺地域の産業・経済の中心地として発展してきました。町内には酒・醤油等の醸造業や呉服商、製蠟業など様々な商家が軒を連ねていたようです。中でも、宝暦年間に藩御用聞を勤めた久留米藩有数の豪商「手津屋」は田主丸町の中心地に本店を構え、この地から巨瀬川、筑後川を下り、河口の若津までの河川運輸の特権を得て、大阪出店との間に輸送路を確立し廻船による活発な商業活動を行いました。